

3世代続く闘争の中で

ビルマ軍事政権による迫害や四十九年に及ぶカレン民族同盟（KNU）の自治権獲得闘争の戦火から逃れた約十二万人のカレン人は、タイとの国境地帯で難民生活を強いられている。難民キャンプには、ビルマ政府軍に対する徹底抗戦を考えている人もいるが、一方で、タイ領に生まれ育ち、本国のカレン州に一度も足を踏み入れたことのない若者も多くなった。二十一歳の女性タエ・ポーもその一人だ。

車高を上げた4輪駆動車は、急勾配の坂道を上下し、何度となくひっくり返りそうになる。後部荷台に乗り込んだ私は、空中へ放り出されないよう、必死に車にしがみつく。乾期には、タイヤの巻き上げる土埃で、全身が真っ白になる。口の中が細かい砂でじやりじやりになる。

人里離れたジャングルの奥深くに位置するキャンプへ到達するのに、国道から山道に入って二時間以上かかる。掌にできた豆がいつの間にか潰れていた。一昨年の雨

季、私の乗った車は何度も立ち往生し、冷たい雨の降る山の中で一晚を過ごしたこともあった。

日中、度を越える気温は、陽が落ちると急激にさがり始める。夜明け前には、防寒用のジャケットを身につけ、さらに毛布を2枚重ねても、寒さで何度も目が覚める。最初の訪問時の「熱い国」という先入観は打ち破られる。私の会おうとしているタエ・ポー（こ）は、そんな山深い密林地帯の難民キャンプに住む。

しかし、数百キロに及ぶタイ・ビルマ国境にある19箇所のキャンプのすべてがそんな所にあるのではない。人口最大のメラキャンプ（約3万人）は国道沿いにあるし、今年3月中旬、ビルマ側から越境した「武装集団」に襲撃を受けたホイックロークキャンプは、交通の便の良いタイの町に近い。

ビルマ・カレン族がニュースになるとき、「戦うカレン族」としての面が強調されがちである。しかし、実際に武器を持って戦闘に参加しているカレン人は、カレン

人口の割合から比べて必ずしも多くない。

ビルマ軍政権による情報統制のため、国内での取材はかなり制限される。そのため、どうしてもKNUを頼ってタイ領からの取材に偏らざるを得ない。

指導部にクリスチャンが多いKNUには流ちょうに英語を話す幹部が多い。外部には、彼らの主張がカレン族のすべてを代表していると伝えられる。そのため、難民の多くがキリスト教徒だとか、カレン人の多くは武装闘争を「積極的に」支持しているという報告になりがちである。

今年のタエ・ポーは笑顔で出迎えてくれた。昨年撮した写真を喜んでくれたようだ。恥ずかしがりやの彼女の自然な姿を写すのに、最初の出会いから実に3年かかった。話をしようとしても会話にならなかつた頃の内気な彼女と同一人物だとは信じられない。

両親が避難したタイ領内の村に生まれ、そこで7歳まで暮らした彼女の「自分はカレン人だ」といっ

う強い民族意識はない。「できれば、私はタイ人としてタイの土地

で生きていきたい」とはつきり言う。愛着のある土地に自分の生活基盤見いだそうとする彼女のような難民の出現は、文化の基盤を土地そのものに求める山岳民族の伝統に当てはまるから皮肉なものだ。

父親は筋金入りの元カレンゲリラ兵士。二人は、同じカレン人でありながら、立場を異にする。

「ビルマ人であろうとカレン人であろうと、私は争い事が嫌いだ」

ビルマ・カレン州に足を踏み入れたことのない彼女にとって、父親の戦いが理解できない。いくら、「カレンの伝統文化を守るう」と説かれたとしても、彼女にはビルマ側に郷愁を感じる祖国はない。「父はビルマ人というだけでビルマ人に関わるすべてを否定している。私はビルマ軍やその兵士は嫌いだが、普通のビルマ人とはうまくやっていける」

しかし、父親に反発しているわけではない。難民キャンプでは手入れが大変な髪を長く延ばしたり、カレンの女性には珍しく耳飾りを

一切付けていない。父親のたつての希望だそうだ。

「男性と女性は結婚しても平等な関係でありたい。それが二人の生活の質を高めることになると思うから」

かなり先進的な考えも持っている。カレン族の男尊女卑の文化を嫌って難民キャンプを飛び出し、バンコクに非合法に住む2歳年上の姉の強い影響を受けているようだ。

英語やタイ語をもっと勉強したいとか、タイの町に住んでみたいという話題になることがある。しかし、そのことをどれだけ真剣に考えることができるのだろうか？ 難民として生きる限りタエ・ポーは、自分で自分の将来を決めるという道を選ぶことはできない。

帰国後、ネガを整理していて、彼女がぼんやりと空を見つめている写真が多くあるのに気付いた。果たして、彼女の視線の先にはいったい何があるのだろうか。